様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：３２６９８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２９４８

研究課題名（和文）英語時制・相と副詞に関する教材開発―自立的学習のためのハイブリッドメソドロジー―

研究課題名（英文）Development of Material for English Tense, Aspect and Adverb --- A Hybrid Methodology for Autonomous Learning ---

研究代表者
高橋　千佳子（TAKAHASHI, CHIKAKO）

東京純心大学・看護学部・教授

研究者番号：８０３５０５２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　日本人英語学習者にとって時制と相の概念を習得することは困難であるとされているが、本研究では、時間副詞を手掛かりとした習得方法を考えた。日本語の「まだ」と「もう」は、英語ではstill, not yet, alreadyで表現されるが、語義の対応が１対１でなく、混乱を生じさせる。そこで、コーパスを用いた例文からstill, not yet, alreadyの練習問題を作成し、動画でイメージ図も作成した上で、従来型の文法説明のグループと動画を用いた実験グループとで効果を比較した。結果は実験グループが上回り、国際学会でも発表を行った。また、2025年度出版のテキストにも反映されることとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
英文法の中でも習得困難とされる項目、すなわち、相、時制、副詞に焦点を当てて文献調査、授業実践、統計を用いた効果の検証、様々な学会での発表とフィードバックを経て、認知言語学の考え方に基づいた大学生向けの教科書出版が決定した。自学自習の習慣づけが難しいとされる昨今だが、英文法のエッセンスを動画の形で提示したうえで練習問題に答えることで、楽しく学びながら効果を実感することが出来る。認知言語学では基本的な考え方を示すため、学生が興味を持てば自発的にさらに深く探究することが期待できる。本研究の成果としての出版により、広く認知言語学の有用性を示すことが出来ると考える。

研究成果の概要（英文）：　For Japanese learners of English, the notion of English tense and aspect is difficult to grasp. My co-researcher and I have considered that the correct knowledge of English time adverbs will help them learn English tense and aspect correctly. English time adverbs, 'still, not yet, are translated into 'mada,' while 'yet' and 'already' are translated into 'mou' in Japanese respectively. Thus, one-to-one correspondence is impossible, which makes the learning more complicated.
Based on the corpus data COCA, we have designed grammar exercises as well as a moving picture illustrating different moves of these time adverbs. We have recruited Japanese university students learning English and divided them into two groups: the conventional learning style group (control group) and the moving picture group (experimental group). After the immediate posttest, we have proved the effectiveness of our material, which will be included in our textbook, due to be published in 2025.

研究分野：認知言語学

キーワード：第二言語習得　英文法　認知言語学

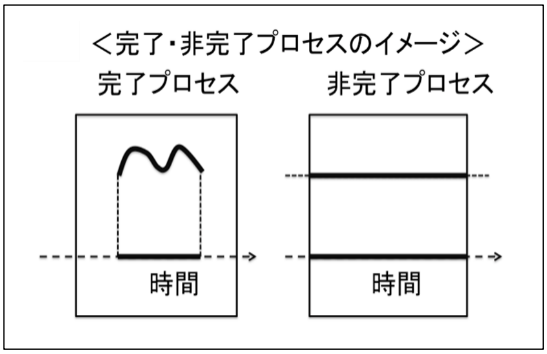
※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

平成 26 年度から 28 年度まで英語進行形に関する日本人大学生への実践研究を実施したが、被験者の大学生は英語の相（アスペクト）に関する理解が不足しており、単純相と進行相との区別が曖昧であることが確認された。これは、進行相だけではなく完了相や結果相までも表す日本語「～ている」の影響によるものと考えた。進行形が不適切とされる目標文の産出においても進行形にしてしまうという過剰使用(overgeneralization)が被験者の御用分析で散見された。

英語動詞の時制・相に関しては、認知文法を提唱した Ronald Langacker 2002 のスキーマ表示図(p.89)が有用であると考えた。完了プロセスでは一定の時間枠に変化が起こるが、非完了プロセスでは安定していて変化は起こらない。このスキーマ表示図を応用することにより、単純相と進行相の区別が明確化される。具体的には、know'は「知っている」という非完了プロセスを表し、一定時間均質の状態が継続するため、単純形となる。一方、'build'の「建てる」は、一定時期に変化するため完了プロセスで表され、進行形となる。



英語副詞に関する研究では、類型論にのみ留まっており(Greenbaum:1969; Cinque:1999)、時制・相との関係を捉えた研究は無い。

２．研究の目的

本研究では、Langacker の完了・非完了プロセスのスキーマ表示図を応用し、英語時間副詞を組み合わせた日本人英語学習者向けの独自の動画教材を開発することを目的とした。特に以下３点の効果を期待した。

（１）　英語学習者への動機づけ
　視覚教材とアクテビティにより、英語時制・相への関心が高まることが期待された。

（２）　学びの定着
　副詞との共起性に着目した教材を使用することで、学習者がイメージしやすく自らが考えて学ぶため、効果が持続しやすいと考えた。

（３）　自立型英語学習
　理解だけにとどまらず、運用レベルまで対応した教材を目指したため、学習者が自ら考え、状況に応じた発話に結び付く効果が見込まれる。反転授業にも適している。

３．研究の方法

英語の時制・相、副詞に関する文献調査、コーパスによる実例収集、英語母語話者による例文精査、英語副詞を用いたイメージ動画の作成、日本人大学生を対象とした実践授業、結果分析、学会発表・論文投稿、の段階を踏んで実施した。、

（１）　文献調査：認知文法、生成文法、英語教育に関する論文・図書を国の内外問わず読み込んだ。英語時間副詞は still, yet, already、日本語は「すぐ」「もう」に絞った。

（２）　実例収集:英語コーパスと日本語コーパスを活用して英語時間副詞 still, yet, already、日本語時間副詞「すぐ」「もう」を含む例文を抽出した。

（３）　例文精査：（２）で抽出した例文から、日本人大学生に提示するための適切な例文を英語母語話者に選別を依頼した。また、文の長さや語彙も調整した。

（４）　動画の作成：　Langacker の完了・非完了プロセスの図を応用したものに英語時間副詞を組み合わせたイメージ動画を作成した。

（５）　実践授業：都内にある私立大学２校において実践授業を行った。事前に希望者を募集し、放課後に空き教室で行った。実験グループは、イメージ動画を見せて練習問題を解かせた。コントロールグループは、従来型の文法説明の後、同じ練習問題を解かせてテストを実施した。

（６）　結果分析：テスト結果を分析したところ、実験グループの学生の平均得点がコントロールグループの平均を上回り、統計的に有意であると検定された。

（７）　学会発表・論文投稿：　実践授業の結果を学会等で発表した。

４．研究成果

まず文献調査の結果を 2018 年 3 月発刊の東京純心大学紀要にまとめた。認知文法における時制・相の捉え方について言及したうえで、看護・医学系英語雑誌から７本の論文を選び、英語現在完了形と副詞の関係について論じた。さらにコーパスデータの日英比較について論じたものを 2019 年にスペインの学会 INTED 2019 で発表し、発表要綱を Proceedings にまとめた。2020 年１月にはハワイの学会で動画教材の内容をまとめたものを発表し、発表要綱にもまとめた。同年３月には、英語アスペクト(相)に焦点を当てた論文を東京純心大学紀要看護学部に掲載した。ここでは、Langacker の完了・非完了プロセスと時間副詞について英語法助動詞との係わりの中で論じた。

日本人大学生を対象とした実践研究の結果も、同年、クロアチアで行われた学会、END2020 で発表したが、コロナ禍であったため、Virtual Presentation の形で参加し、学会の発表要綱にも掲載した。その後はテキスト出版にむけての準備を進め、動画によるイラストを含めた大学生向けテキストの 2025 年度出版が決定した。このテキストには過去の科学研究費助成金研究の成果とされる内容が盛り込まれ、文法が苦手な学生でも、シンプルで各文法項目の本質を捉えたイラスト映像によって楽しみながら英文法を学べることが期待される。また自習用教材としての要素もあることから、反転授業教材としても活用できる。

コロナ禍で思うように研究が進められない時期もあったが、研究期間の延期を認めて頂いたおかげで出版にこぎつけることができ感謝している。

＜出典＞

Cinque, Guglielmo (1999). *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*, Oxford University Press, New York

Greenbaum, Sydney (1969). *Studies in English Adverbial Usage*, Longman, London.

Langacker R. W. (2002). *Concept, Image, and Symbol*, Mouton de Gruyter, Berlin・New York

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Chikako TAKAHASHI, Akemi MATSUYA	４．巻 8
２．論文標題 An Effective Method of Teaching English Tense and Aspect through Time Adverbs	５．発行年 2020年
３．雑誌名 International Conference on Education and New Developments	６．最初と最後の頁 375-379
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋　千佳子	４．巻 25
２．論文標題 英語法助動詞canの完了形	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東京純心大学紀要　現代文化学部	６．最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Chikako TAKAHASHI & Akemi MATSUYA	４．巻 18
２．論文標題 Effective Teaching of English Time Adverbs	５．発行年 2020年
３．雑誌名 2020 Conference Proceedings Hawaii International Conference on Education	６．最初と最後の頁 487-495
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋　千佳子	４．巻 4
２．論文標題 法助動詞意味解釈に与える英語アスペクトの影響	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京純心大学紀要　看護学部	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Chikako TAKAHASHI, Akemi MATSUYA	4．巻 13
2．論文標題 ‘Using a cognitive linguistics analysis of time adverbs to teach English aspect’	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Proceedings of the 13th International Technology, Education and Development Conference In Valencia, Spain	6．最初と最後の頁 2812-2819
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋千佳子	4．巻 2
2．論文標題 英語現在完了受動態と副詞の役割―認知言語学の視点からの分析―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東京純心大学紀要看護学部	6．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋千佳子	4．巻 18
2．論文標題 『ハムレット』の独白から見るbe動詞の意味解釈―To be, or not to be, that is the question-	5．発行年 2023年
3．雑誌名 カトリック文化KAσOAIKOS　東京純心大学	6．最初と最後の頁 19-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 Chikako TAKAHASHI, Akemi MATSUYA
2．発表標題 An Effective Method of Teaching English Tense and Aspect through Time Adverbs
3．学会等名 International Conference on Education and New Developments（国際学会）
4．発表年 2020年

１．発表者名 Chikako TAKAHASHI & Akemi MATSUYA
２．発表標題 Effective Teaching of English Time Adverbs
３．学会等名 2020 Hawaii International Conference on Education（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Chikako TAKAHASHI, Akemi MATSUYA
２．発表標題 ‘Using a cognitive linguistics analysis of time adverbs to teach English aspect’
３．学会等名 the 13th International Technology, Education and Development Conference In Valencia, Spain
４．発表年 2019年

１．発表者名 原田依子、相澤一美、高橋千佳子、市毛陽子、高橋留美
２．発表標題 語彙と文法のインターフェイス：名詞の理解が文解釈に与える影響について
３．学会等名 JACET第56回国際大会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 松谷明美、高橋千佳子
２．発表標題 Passive Sentences With and Without Adverbs: An Analysis of Writing Productions by Japanese University Students
３．学会等名 16th Hawaii International Conference on Education（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 『ハムレット』の独白から見るbe動詞の意味解釈－To be, or not to be, that is the question-
２．発表標題 シンポジウム　（いのち Part 1）
３．学会等名 東京純心大学キリスト教文化研究センター
４．発表年 2022年

１．発表者名 松谷明美、高橋千佳子
２．発表標題 Analysis of Modal Verbs Based on Japanese Students' Writing
３．学会等名 Second Hawaii International Conference on English Language and Literature Studies (HICELLS 2023)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 松谷明美、高橋千佳子
２．発表標題 A Study on the Frequency of English Modal Verbs in the Second Language Acquisition of Japanese University Students
３．学会等名 The 12th Malaysia Conference on Language, Literatures and Culture (MICOLLAC 2023)（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Akemi MATSUYA	４．発行年 2021年
２．出版社 BRILL, Leiden, Boston	５．総ページ数 50
３．書名 Deriving Passives with Pragmatic and Semantic Implications: From the Perspectives of Formal and Fundamental Linguistics, in Passives Cross-Linguistically; Theoretical and Experimental Approaches	

１．著者名 高橋千佳子・松谷明美	４．発行年 2025年
２．出版社 金星堂出版	５．総ページ数 100
３．書名 To Go out into the World	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松谷　明美 (Matsuya Akemi) (60459261)	高千穂大学・人間科学部・教授 (32637)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関